

つぶやき



山村 きよ

保育の心を求めて

ゆれうごく幼児教育界にあつて、多くの学者先生はそれぞれの自説をかかげて幼稚園界に迫っています。

幼稚園の先生方はいろいろな学説をまともにうけてなやんでいます。

母親たちは幼児を目の前において利用されたり、自己流の考え方でそれらをうけとめて、幼稚園の上司や、若い先生方をつきあけることもあります。

なやみ多い幼稚園の現場、先生方はそうした中で「何かを知りたい」「保育の心をたしかめたい」などの気持ちであせり出した三、四年前のこと。

こうしたなやみを持つ人たちが、時代の波にゆられている時、お茶の水幼稚園長として就任されたのが周郷先生でした。

保育の心を求めて、純すいな幼児教育者のまわりに集まった人たちはたくさんありました。私も母校、お茶の水幼稚園の現場には関心を持っておりましてので、さっそく園長室を訪れて

単刀直入に「今まで先生の考えておられたことを早く実現してほしい」とおねがいました。

そしてたびたび周郷先生とおあいして、時には「お茶の水は幼稚園から大学までを一つにして大改革が必要だ」と話されたこともありまして。私は今でもそのことばを信じて、母校の大改革をたのしみに待っている卒業生のひとりです。

ふりかえってみますと周郷先生は、いつもいつも「むずかしい、むずかしい」と口ぐせのようにいわれながら、何かを実現させておられました。それは園長室から流れ出るすばらしいメロディー（園児の耳にも響いていたと思います）、わざわざ田舎まで山羊をつれにいらして園庭に解放なさったり、はだしの子どもたちとたわむれたり、暮のおもちつきや、附添なしの一泊旅行など、子どもたちのためには数多くの思い出を残し、お母様方には感動のひとつときを持たせるようなお話をされて、名残りをおしまったことと思います。

私たちみどり会研究会員によせてくださったご好意は、やがて「保育のこころを求めて」というテーマのもとに集まり、研究熱心な人たちの心のつながりをつくり、今夏は三回目の研究会をもつことになりました。この研究会の特徴は、先生方を囲んでみんなが同じ食堂で三食共にして、夜昼を語りつくせる会合で、どこからの圧力もなく、すべてを自費で、みんなの力で

開会から閉会までを実に快よく終ることの「魅力」だと思えます。いつも小さなみどり会が、こんなに大きな仕事をしたのか？と会員を喜ばせる研究部の仕事でもあります。この基礎づくりに大きな役割をはたして下さった周郷先生に大きな感謝の気持ちを表わしたいと思います。

### 粗製乱造されている幼稚園の先生

幼稚園が義務制でないためか？国は幼稚園の増設には力を入れてくださいますが、幼稚園の先生を造り出すことにはあまり力を入れていないように思われます。とくにその「質の問題」では？……

毎年開かれる東西に分かれた指導者講座にも特定の人、しかも毎年同じ人たち（私学の場合）が選定されていて、現場にはあまりはねかえってこないように思われます。

幸いと各都道府県では自主的な研究活動が盛んになってきたのでうれしくは思いますが、……そうした中で耳にすることは「粗製乱造の先生が多い」「幼稚園の先生としてのモラルの低下」ということです。

最近、保育所増設によって十月～十一月には多人数の採用が決定してしまう中には、積極性のあるすぐれた学生が多く、十二月ごろから採用が始まる私立幼稚園のみじめさは格別です。私たちにはとても考えられぬ合理的な考え方で（待遇がよくて、

幼児の昼寝の時間に何でも雑用が片づけられるから帰宅時間が早い、などと）どんどん公立保育所に就職決定をしてしまう場合が多いのと、一昨年あたりから増設された幼稚園教員養成所などを出て来た人たちの中には、現代っ子の特徴をもった人たちも多く、少し気に入らぬことがあれば友だちをさそって、さっさと職場を替えてしまうような幼稚園の先生が増えてきたことはなさない事実です。甚しい者は入園式の二週間前に退職してしまうなど、モラルの低下はあちこちで耳にすることです。また、こうした中で私たち現場の者のなやみは、多くの大学の中には「実際よりも理論を」と叫ばれる先生方もおられて「教育実習のさせ方のむずかしさ」も心配の種です。それにもまして心配なのは、増設された教員養成機構では「実習場所を学生が自分で見つけねばならない」学校もあるらしく、どんな幼稚園でも手伝っていれば自然と免許状がとれてしまうようなことを考えた時、「どんな先生」が世の中に流れていくのか？

幼児が求めている「保育の心を知っている先生」には程遠い感じがします。昔から「石の上にも三年」と基礎づくりの必要がうたわれているのに、幼稚園の現場では二年～三年で去っていく先生の何と多いことか？がっかりするこのごろで、残念でなりません。

（一九四八、三、三〇）